

産学官連携 日本酒プロジェクト

メンバー数：20名 活動場所：明和町
 実施主体：明和町防災企画課
 一般社団法人神都の祈り
 担当教員：千田 良仁（教育開発センター）
 活動年度：H28, H29, H30

- ・完醸祭（17日）
- ・おかげ横丁朔日朝市へ出店（1日）
- ・第5回朔日バルへ出店（1日）
- ・御裳濯川仕込み（2日）
- ・伊勢と日本スタディプログラム打合せ（5日）
- ・伊勢と日本スタディプログラム歓迎会でPR（28日）
- ・齋王仕込み（11日）
- ・おかげ横丁朔日朝市へ出店（1日）
- ・第4回朔日バルへ出店（1日）
- ・伊勢のだいどご市へ出店（23日）
- ・アグリビジネス創出フェア2028ブース出展（20、22日）
- ・群馬県明和町産業祭へ出店（4日）
- ・おかげ横丁朔日朝市へ出店（1日）
- ・第3回朔日バルへ出店（1日）
- ・名刺作成
- ・奈良県曾爾村のイベントへ出店（28日）
- ・百年こほん上映会で試作提供（23日）
- ・明和町制60周年記念めいわまっりへ出店（21日）
- ・第2回朔日バルへ出店（1日）
- ・抜穂祭（8日）
- ・神社関係者向けフライヤー制作（8日）
- ・おかげ横丁朔日朝市へ出店（1日）
- ・第3回全国高校生SBP交流フェアへ出店（16日）
- ・第3回全国高校生SBP交流フェアのフライヤー制作（12日）
- ・クラウドファンディング研修会（7日）
- ・マーケティング会議（1日）
- ・「みえ食旅バスポート」利用促進プロジェクトとコラボし、酒粕スイーツを食堂で配る（26日）
- ・青山ファーマーズマーケットの反省会（23日）
- ・おかげ横丁朔日朝市へ出店（1日）
- ・青山ファーマーズマーケット打合せ（4日）
- ・第36回齋王まつりへ出店（2、3日）
- ・伊勢志摩の酒サミットへ出店（27日）
- ・伊勢志摩の酒サミット打合せ（25日）
- ・お田植え祭（12日）
- ・新メンバー向けミーティング（25日）
- ・平成30年度の打合せ（13日）



◆今年度の活動を振り返って（成果と課題）

日本酒の販売が2年目となった今年度は様々なことに挑戦しました。前年度の活動の経験をもとに、産学官連携日本酒プロジェクトの学生メンバーである私たちが活動すべきことは何か、私たちは何がしたいのかを考えながらの一年でした。

例年通り、来年度の日本酒になる酒米の田植えから活動が始まりました。それと並行して、「神都の祈り」を軸に学生がそれぞれ企画し挑戦していきたいという思いのもと新メンバー含め、学生メンバーの団結を深めていきました。そして挑んだ、東京青山のファーマーズマーケット出店では、「神都の祈り」と明和町のPRを目的に、日本酒だけでなく明和町の名産品の提供や酒粕を使った商品開発に取り組みました。当日までの準備、イベント中、その後まで、うまくいったという実感は得られず、反省点の多かった企画でしたが、メンバーそれぞれが役割を持って取り組むことができました。年度の初めに失敗を経験した私たちですが、「神都の祈り」に関わる社会人の方々から、「もっと挑戦してもっと失敗してほしい」との言葉を頂いたことで、これ以降もいろいろなことにチャレンジすることができました。「神都の祈り」を知ってもらいたいと、高校生、神社関係者の方々など、伝えたい相手と伝えたいことを意識したフライヤーの作製や、おかげ横丁の朔日朝市、伊勢市駅前の朔日バルというイベントにも出店させていただきました。朝市や朔日バルでは、継続して出店することで、「神都の祈り」に興味を持ってくださる方々と多くコミュニケーションを取ることができました。

今年度は、「神都の祈り」を地域の方々を知ってもらおうということを念頭に活動してきました。来年度は日本酒の販売を積極的に取り組んでいきたいと思っています。この一年で多くのメンバーが「神都の祈り」に関わり、それぞれが「神都の祈り」プロジェクトでやりたいことをイメージできたと思います。「神都の祈り」を通して地域のことを考えながら、学生が自主的に成長する機会を設け、「神都の祈り」の物語を作り、進めていきたいと考えています。



特にアピールしたいポイント

今年度は学生メンバー全員が常に主体性を持って活動できた一年となりました。各メンバーが自分でやりたいことを一から企画できるところがこのプロジェクトのおもしろいところでもあります。特に今年度は一人ひとりが企画を提案し、それらをメンバー全員で協力して、成功できるように頑張りました。



実施主体様の声

新しいことに挑戦することは容易ではありません。日々の生活や業務に追われると、現状に甘んじて動けなくなってしまふからです。しかし挑戦することだけが、新しい道を切り拓くことを私たちは知っています。これは大学生でも民間企業でも変わりはありません。当社にとって日本酒プロジェクトは新たな挑戦であり、学び成長させてもらっています。是非、大学生もこの機会を最大限利用し、挑戦を通じて自らの可能性を切り拓いてほしいと考えています。

